いとすぎの丘

日本赤十字豊田看護大学
Japanese Red Cross Toyota College of Nursing
Vol.6　発行日／2007年10月1日

いとすぎ祭

■ 第４回いとすぎ祭
いとすぎ祭を通して得たもの／3年生　東　峻介　　いとすぎ祭の改革／2年生　沼津　貴大
いとすぎ祭を終えて／3年生　佐藤ゆかり　　体育祭を行って／3年生　池田　美穂
■ 学生の活動
インタビュー：空手と大学生活　2年生　近藤　史崇
インドでのボランティア体験　3年生　鈴木沙弥香
■ 公開講座
高血圧の健康管理　成人看護学　教授　三河内憲子
尿失禁の予防と生活習慣是正のために　地域看護学　教授　土屋　紀子
地域住民の介護サービスに対する気持ちにふれて　老年看護学　教授　伊藤　孝治
老年看護学　講師　小林　尚司
■ 第8回日本赤十字看護学会学術集会を開催して　学術集会長・看護学部長　小西美智子
■ 「看護系大学における教員のあり方」を聴講して　成人看護学　助手　石原　由華
ファカルティ・ディベロップメントに参加して　地域看護学　助手　齋藤　公彦
■ Academic Library　図書館　司書　中尾　明子
■ 研究の窓、研究室紹介　母性看護学　教授　森田せつ子

Information

■ 公開講座　オープンキャンパス報告、平成20年度入学試験日程
編集後記　学長随想は、今回休載させていただきます。

第1回「地域看護学実習Ⅳ（国際保健）」の開催について

平成19年8月27日（月）から8月31日（金）にかけて第一回地域看護学実習Ⅳ（国際保健）がハワイにて行われました。

この実習は、ハワイ大学看護・歯科衛生学部、その他現地の医療福祉施設の全面的な協力により実施されました。

いとすぎ祭

いとすぎ祭を通して得たもの

いとすぎ祭実行委員長　3年生　東　峻介

第４回いとすぎ祭も無事に終わり、振り返ってみると様々な出来事が思い出されてきます。委員長という役を任された時、「今までと何か違うことをしたい」という思いがとても強く、例年より早く活動を始めました。企画内容は４月には固まって、

５月にはこれまでにはなかったリハーサルなどの最終確認を行ないました。ここまで順調に進んでこられたのは、他でもないいとすぎ祭実行委員全員のおかげだと思っています。

「いとすぎ祭といえば○○」というような、この大学だけの企画を作りたいという意図があり、新しい企画も今年はたくさん増えました。たった一年でオリジナルの企画が定着するとは思ってはいませんでした。

また、いとすぎ祭を計画するにあたって、向上心を持って臨みました。これが、いとすぎ祭を通して得たものの一つでした。この向上心を、実行委員だけでなく、学生全体が持てるようになったら、それこそ素晴らしいことだと感じています。私たちの意志を、この先継いでくれることを期待しています。

このいとすぎ祭を通して、何よりも一番大きなものを得ることができました。それは学年を超えた仲間です。1年生から3年生まで年の差を気にすることなく、何でも言い合え、ぶつかり合える関係は本物だと感じました。朝早くから夜遅くまでみんなと一緒に仕事をして、笑い合ったり泣いたりした日々は、決して忘れられるものではありません。「今年のいとすぎ祭は楽しかった」そう言ってくれることが、一番の褒め言葉です。

最後になりましたが、いとすぎ祭に協力してくれた人すべてに感謝しています。

いとすぎ祭実行委員の皆さん、今まで本当にありがとうございました。

いとすぎ祭の改革

副委員長　2年生　沼津　貴大

私は、第4回いとすぎ祭実行委員の2年生代表として、いとすぎ祭に携わりました。そして、今年初の企画である前夜祭の運営を任されました。前夜祭は、今年が初の試みであって、企画や運営、内容の検討など、ゼロからのスタートでした。前夜祭を受け持ったのは、私を含め2年生の学祭委員でした。私たちは、何度も考えを搾り出し、発案、廃案を繰り返しました。そして、自分たちの考えをまとめ、仕事を分担して取り組みました。当日が近くなるにつれて帰宅時刻が遅くなっていきました。

前夜祭当日、始まる前には2年生学祭委員で円陣を組み、気合を入れ前夜祭の運営に向かいました。皆、今の自分にできること、やるべきことが目に見えており、素晴らしい連携でした。また、先輩たち、後輩たちの支えがあったおかげで、前夜祭を成功へと導くことができました。翌日のいとすぎ祭を盛り上げるよいきっかけにすることができたのではないかと感じました。

後日のアンケートでは、前夜祭についての反省点や指摘もありましたが、「来年もやってほしい」などうれしい感想が多くみられました。来年の前夜祭は、今年度に勝るものになるでしょう。

今年は、いとすぎ祭改革の年でした。そのいとすぎ祭実行委員になれたことを、私は後悔しているどころかむしろ誇りに思っています。「たかが大学祭」と思っている人はたくさんいると思います。ですが、今年度のいとすぎ祭で「たかが大学祭」も面白く楽しいものと感じてもらえていればうれしく思います。

いとすぎ祭を終えて

副委員長　3年生　佐藤ゆかり

今年度の第４回いとすぎ祭は、5月25日：前夜祭、5月26日：一般公開の日程で行われました。25日は雨でしたが、26日は

1日快晴で本当によかったと思います。昨年は、当日の朝まで雨が降るか降らないかハラハラしたのを覚えています。

実行委員として2度目のいとすぎ祭は、昨年とは違う色を持ったものでした。自分の立場も委員の顔ぶれもガラッと変わったように思います。企画としては、来客者が体験できる体験スタンプラリーや、学校を知ってもらうことを目的としたスライドショーなどを増やしました。当日、私は、実際に体験したり見たりすることができなかったのですが、本学ならではの企画として今後あり続けてくれたらと思います。また、昨年から引き続いて行った模擬店やステージ、ヘルスチェックは、昨年と同様に活気がありました。来客者から学生まで、たくさんの人たちに楽しんでいただけたのではと思います。

当日までいろいろな問題はありました。たくさんの壁にぶつかりながら、なんとか実行委員全員でやってこられたと思います。終わったときの達成感は本当に気持ちのいいものでした。終わってしまったという寂しさも感じたのですが、それは準備や当日が充実していたからだと思います。協力してくれた皆さん、本当にありがとうございました。

来年度は来年度で、今年とはまた一味違ういとすぎ祭を期待したいと思います。

体育祭

体育祭を行って

体育祭実行委員長　3年生　池田　美穂

体育祭実行委員長に任命されたときに、前年度よりも楽しく充実した体育祭にしたいという思いがありました。本学では、体育祭といとすぎ祭の2つの行事があります。体育祭は、「心身ともにリフレッシュして、学年を超えた団結力を養う」ことを目的としました。

体育祭実行委員という組織で動くのは初めてだったので、まずどのように動き始めればよいのかわかりませんでした。私は人に仕事を配分するということがなかなかできず、模索する日々でしたが、いろんな方々に相談をし、助けてもらいながら運営していきました。

一番苦労したことは、情報共有です。体育祭実行委員内でも情報共有がうまく行えず困難を極めたのに、全学年に情報を共有してもらうことはさらに難しかったです。今回のことで、呼びかけや情報提供の大切さを知り、情報提供の方法を工夫する必要があると感じました。

計画は、余裕を持って行えたという思いがありましたが、体育祭が近づくにつれて、本当は足りないことがいっぱいあることに気づき、前日までバタバタしてしまいました。事前に簡単なリハーサルも行いましたが、当日は約420名を動かすことになります。それを想像すると、焦りや不安が押し寄せてきました。

当日は、これまでの情報の伝達不足や企画の詰めの甘さなどが出て、トラブル続出でした。しかし、皆様のご協力をいただき、無事、楽しく体育祭を終えることができました。

体育祭のために力を貸してくださった皆様、本当にありがとうございました。この経験を通して、人に伝えること、人のありがたみ、責任者としての役割など多くのことを勉強させてもらいました。これらを今後に活かしたいと思います。

学 生 の 活 動

インタビュー：空手と大学生活

2年生　近藤　史崇

06年度入学の近藤史崇さんは2歳で父から空手の手解きを受け、5歳頃から本格的に取り組んでいます。彼は代々格闘技に関わりをもつ家系で育ち、常に落ち着いた雰囲気をもつ人です。

Q．初めに、空手について教えてください。

A．空手は格闘技で、型（一人で動きを見せる）と組み手（相手がいる）があって、組み手は寸止め（直前で止める）とフルコンタクト空手（頭から足まで、全体的に接触する）にわかれます。自分はフルコンタクト空手をやっており、マウスピースなどの最低限の防具で試合に臨みます。

Q．練習はどのようにしていますか？

A．自宅に道場があって、朝は4時から6時半か8時まで、夜はサークルや課題状況によって18時か19時から始め、21時から24時まで練習しています。1日5食摂り、通常の食事3回に捕食2回摂っています。栄養士やトレーナーのサポートも受けています。また、試合に関連して、精神面も訓練しています。

Q．成績はどうですか？

A．フルコンタクト空手は、体重身長ポイントによって階級がわかれる体格別と無差別級があります。自分は該当する階級の日本代表で、昨年東京武道館でおこなわれた試合で世界2位でした。

Q．ところで、看護大学で学ぼうとしたのはどういうきっかけですか？けがですか？

A．高校2年の試合中に、自分も審判も親も医師でさえ気づかなかった肋骨骨折という異常に看護師さんが気づき、試合を止めてくれました。もしそのまま続行していたら、重大なことになっていたかもしれません。それを空手の経験がない看護師さんだけが気づいてくれたことに感激して、看護師になってその時の恩人に会いたいので。でも、自分の進路選択は周囲には驚きだったようです。

Q．学業との両立はどうしていますか？

A．現在空手の他に、ボクシングや合気道も取り組んでいます。1日の生活サイクルに練習時間を組み込んで、練習時間を確保しています。睡眠もサイクルを考慮してとっており、眠い時は何かをして対処しています。

Q．今後の目標を教えてください。

A．去年の大会で負けた相手（フランス代表）に勝つことです。今年９月下旬頃に試合が予定されると思うので、そこで勝ち、その後も防衛を続けたいです。

＊ありがとうございました。試合での活躍を期待します。ぜひ頑張ってください。

インドでのボランティア体験

3年生　鈴木沙弥香

今年春、私は在学中にどうしてもあの有名なマザーハウスで働きたくて、インドへ行ってきました。

マザーハウスは「貧しい人のなかのさらに最も貧しい人のためにつかえる」という目的のもと、マザーテレサによって創設された施設のことです。いくつか種類があり、私はその中の、『通称：死を待つ人の家』で１ヵ月お世話になりました。

ボランティアの内容は、洗濯物を洗ったり干したりなど家事のようなことから、食事介助や清拭や排泄介助まで様々です。基本的に役割が決まっていないので、自分でやるべきことを探すのです。ボランティア先では、片言ですが、いろいろな国の人たちと接することができました。英語の通じない入居者たちとも、通い続けることで顔を覚えて、笑顔を返してくれるようになりました。

辛かったのは、入居者への接し方と路上生活者への接し方のギャップでした。入居者は現地スタッフが連れてくる元路上生活者です。その入居者にはさまざまなケアをすることができるのですが、現実の路上生活者には何もできません。物乞いをされてもマフィアと繋がっている可能性があるということ、キリがないこと、インドの人々も誇りをもって生きているのだから、むやみにお金を与えるのはよくないことなどを含めて、「無視をする」のが最良とされています。『愛の反対は無関心だ』とマザーは言っていらしたというのに…。

公 開 講 座

高血圧の健康管理

成人看護学　教授　三河内憲子

去る3月3日（土）、成人看護学領域担当（教員6名）による公開講座、「高血圧の健康管理」を開催しました。広報・公開講座委員会および企画課のサポートによって、盛況のうちに実施することができました。チラシのタイトルを「仮面高血圧」あなたの生活は大丈夫？

この講座で自分の生活習慣を振り返ってみませんか？としてPRしたことが興味を引いて、定員40名以上の応募がありま

した。参加者40名の内訳は男性22名、女性20名で、60代から70代の参加者が過半数を占めました。講座の内容は、まず高血圧の基礎知識として、高血圧とその恐ろしさ、家庭血圧測定の重要性と測定上の注意、生活習慣の修正（食生活を中心に）について、スライドで説明し、その後、A．血圧計の仕組みと計り方とB．生活習慣の修正（減塩の工夫の試食）の体験の演習を行いました。演習内容は、A．コロトコフ、オシロメトリック法を用いて血圧を正確に測る方法とそのポイントを学び、数値の意味や病気に対する理解を深めることとしました。B．生活習慣アセスメント表（高血圧者用）から自己の食生活を分析し、教員のコメントにより現状の食生活をグループの皆で考えること、さらに塩分量をランク付けした減塩味噌汁の味と工夫した味の試食をして、塩分量との関係に関心が向くきっかけとすることで食生活の修正が可能であることを喚起しました。参加者から、食生活の塩分について参考になった、味噌汁の濃度が自分で確認できた、血圧測定を親切にみてくれた、個々の聞きたいことにも十分対応してくれた等の意見を得て、おおむね好評でした。今後の公開講座に対する受講者の期待も知ることができました。

尿失禁の予防と生活習慣是正のために

地域看護学　教授　土屋　紀子

今年度の第一回公開講座において、「私の尿失禁は自然なことかしら？誰にもいえない悩み」を中心話題に6月2日（土曜日）に実施しました。

参加者は男性1名、女性16名の計17名で、年齢幅は45才から81才まで、平均年齢は64.0才（SD10.11）でした。テーマにそった講演のほか、身体計測なども実施しました。参加者は市町村の広報から情報を得た者が大半でした。多数の参加者来場を期待しましたが、背後事由には、1）興味があるが羞恥心から参加を躊躇した、2）農作業が忙しい時期になっていた、3）スクールバス時刻と公開講座開始時間との不連動、4）開校新しく地域住民との連携希薄などを推測できました。

ところで、公開講座参加者は非常に活発な参加態度を示されました。羞恥心においては、尿失禁について誰にも知られたくない、友人や家族など身近な人でも相談できない思いを表出された。実際に尿失禁についての悩み、困っているのに身近な相談者がわからない、生死に繋がらない問題だから、すぐに保健行動に結びつかないなどの健康問題が見えました。

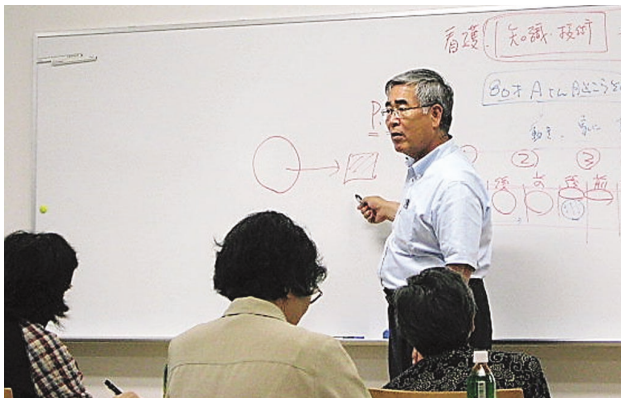
しかし、参加者はこの公開講座にて尿失禁への不安や羞恥心から解放されたかのように、表情明るく、演者の話に反応されました。尿失禁予防を意図した500gの玄米入り花笠ダンベルによる筋トレ「骨盤底筋トレーニング体操」を行った際には、積極的な意欲と活力で運動を楽しみ、予定時間延長してもトレーニングを継続するよう希望されました。その結果として、アンケートに参加者全員が満足感を示していました。

今後、日常誰もが知っているようで、実際はよく知らない話、他者に聞けないで、悩んでいるような健康と暮らしの問題の要望もあり、地域住民の意向を反映できる内容を検討したいと思います。

ご協力くださった皆様に感謝いたします。

地域住民の介護サービスに対する気持ちにふれて

老年看護学　教授　伊藤孝治・講師　小林尚司



平成19年度の第2回目の公開講座を老年看護学領域が担当しました。「介護サービスの基礎的知識」をメインテーマに、入梅時期の晴れ間の6月23日（土）9時30分から11時30分の2時間、企画課等のご協力を得て無事実施することができました。

今回の講座の主な意図は、「さまざまな高齢者サービス施設に関して詳しく知ってもらう」こと、本学老年看護学教育の紹介という2部構成でおこないました。

参加者が11名と少なかったのですが、逆に参加者にとっては自発的に活発な質疑がしやすい環境となったようです。質疑は、介護サービスやサービス施設に関するものが主でありましたが、介護制度自体や介護に関する他の諸問題までに及ぶ広範囲で、担当者にとっては、想定の範疇を超えるものまで登場しました。

今回の機会を通じて、住民の介護への関心の高さを改めて実感する機会となりました。講座の意図は、参加者の反応から十分に達成されたものと推測できました。また、老年看護学教育の紹介には、大いに期待するとの賛意と励ましをいただき、本学の教育に対する紹介ができたことを一つの成果と考えています。

第8回日本赤十字看護学会学術集会を開催して

学術集会長・看護学部長　小西美智子

2007年6月16日(土)と17日(日)に本学を会場に、第8回日本赤十字看護学会学術集会を開催いたしました。梅雨の時期であるため傘袋を用意したりと雨対策も配慮したのですが、開催日2日間のみ快晴でその前後は雨降りという、天候も味方に引き入れて、全国から約300名の参加者を得る事が出来ました。大学構内はいつもと異なって、看護学生ではなく、日本赤十字医療機関の看護職、日本赤十字系看護大学の看護教員、さらに愛知県内の保健医療福祉機関の看護関係者等が、学習したり研究発表や意見交換をする場となりました。そして、学生も将来の看護職として学習したり、または会場設営や運営に協力者として、参加していただきました。

日本赤十字看護学会は「赤十字の理念に基づき会員相互の研鑽と交流を図り、看護学の発展をめざすことを目的とする」を達成するために、年1回学術集会を開催しています。日本赤十字学園にある5大学、2短期大学の中で、6校がすでに学術集会を開催しています。本学はその前身である日本赤十字愛知短期大学の時代を含めてまだ1度も開催していませんので、大学開設と同時に、日本赤十字看護学会理事長から、第8回学術集会を開催する要請を受けました。学術集会のテーマは「看護活動と地域社会との協働」とし、看護活動の目的を達成するために、地域社会にある種々の保健医療福祉機関及び専門職、さらに住民との協働のあり方を模索したいと考えました。このテーマに基づいて1年前の平成18年6月に、当大学の看護教員を中心に名古屋第一赤十字病院及び名古屋第二赤十字病院の看護部の協力を得ながら学術集会に関する委員会を立ち上げ、教育·研究·看護業務の合間を使って、プログラムに掲載されているシンポジウム1課題、テーマセッション6課題、口演発表51演題、示説発表24演題等を企画運営しました。

この学術集会の成果として、日本赤十字の看護実践と教育活動が協働して、さらに人々の健康支援を行い、地域社会に貢献するものと確信しています。

さる平成19年3月2日、野口美和子先生をお迎えして、平成18年度日本赤十字豊田看護大学ファカルティ・ディベロップメント「看護大学における教員の在り方」をご講演いただきました。それについて、本学教員から寄稿いただきました。

「看護系大学における教員のあり方」を聴講して

成人看護学　助手　石原　由華

看護大学の助手になって3年が過ぎてもなお、臨地実習での学生指導では戸惑うことが多々あります。最近、学生が受持つ患者は複数の疾患を罹患していることが多いため、看護技術も知識も未熟な学生には全く手に負えず、そのため教員は学生と共同して患者に関わる形をとらざるを得ません。具体的に言えば、実習中は朝の「おはよう」の挨拶もそこそこに、患者の状態や実施する予定のケア等を確認し、ケアや検温をする時には必ず学生と共に行動しながら、患者様の状態一つ一つに一喜一憂する毎日を送ることになります。当然、教員と学生との間の距離は接近し連帯感や一体感が芽生えてきますが、その反面、学生が教員に対して依存的になりすぎて指導しにくい状況に陥ります。こうした時にはいつも、学生との距離をどのようにとっていけばいいのかとても悩んでしまいます。

今回、野口先生が話された「看護学実習の教授—学習上の特徴」の中で、“相互に支持し助け合う状況”、“共同学習”、“学生を問う作業に従事させる”、“学生が教員と共同の課題を追求する”、“何のために学習しているのかを明確にして参加させる”、“学生の能力を均質化させるよりもむしろ開発育成できる（個別化の原理）”、“情緒的な経験”が強調されていました。私の指導法もこれらに合致していると思われ、少し自信がもてそうな気がしました。

今後も、実習では特に“誰のために、何をすべきなのか”を学生にしっかり自覚させることが必要であるとともに、時間的な制約あるなかでも、学生が患者様との関わりの中で“自分に欠けている部分は何なのか”を自ら発見できるように、学生一人ひとりに対して丁寧に接していきたいと思いました。

ファカルティ・ディベロップメントに参加して

地域看護学　助手　齋藤　公彦

平成19年3月に本学で行われたファカルティ・ディベロップメントに参加し、野口美和子先生の講演を聴講しました。私自身はまだ大学職員として経験が浅いため、看護大学教育について、新しい学びおよび考え方について学ぶことができました。教育研究者として知識だけでは不十分であり、基礎的知識および技術の精選を行うことが重要であることを学びました。また、どのような目的・目標を持っているのかが重要であり、それらが達成できるためには、実践と研究の教育活動が重要であることも同時に学ぶことができました。

その他にも、保健医療職にとって必要な点として、現代の保健医療では、患者中心の医療によってニーズが多様化されたことにより、きめ細やかな看護、また高度な看護が必要とされ、人に合わせた看護を実施することがあげられます。しかし、同時に必要な地域に合わせた看護という視点については、なかなか気づきにくいのです。私が本大学へ赴任してくる以前、広島県の山間地域の役場で保健師として保健事業に携わって

いた時も、講習会などに参加しても、講習会で教えられる事業のうち、過疎地域に対応したものは少なく、私自身苦労した経験が多々あり、実際の状況を都市部の保健師と話をしても理解されにくい状況でした。

現代の保健医療に関しては、都市部にいると「地域に合わせた看護」とはなかなか気づきにくいことではあるのですが、地方での急速な高齢化、また地方分権に対応していく上で、非常に重要ではないのかと考えます。

なお、講演内容は日本赤十字豊田看護大学紀要第3巻1号5ー12頁に掲載されています。

Academic Library
図書館とILL

図書館司書　中尾　明子

図書館では現在、看護学・医学を中心に約3万5千冊を所蔵しており、大学完成年次である平成19年度末には、3万8千冊を超える予定です。近隣学術分野である社会学、社会福祉学、心理学関係書の収集も厚いという特徴ある蔵書となっています。

救護看護婦養成所に始まり、名古屋赤十字（高等）看護学院、名古屋赤十字看護専門学校、日本赤十字愛知（女子）短期大学、日本赤十字豊田看護大学へと歴史を重ねてきた本学は、雑誌「看護」を第1巻（1949年）より所蔵、「看護学雑誌」を第1巻（1946年）より所蔵しているというように、全くの新設看護大学とは蔵書の重みの点で異なっているのも特徴です。ただ、看護学の収集の厚さに比べ、「人を看る」看護の専門大学として心理学や哲学の蔵書が、出版の古いところで薄いのが弱点でしょうか。新刊は収集できても、絶版になった古典の収集が難しいのです。

その弱点を補うのに、図書館ではILL(Inter Library Loan)という「図書館相互貸借」のサービスがあります。全国の大学図書館との連携はもちろん、地元の豊田市中央図書館との

連携もしています。図書の貸借や複写文献の取り寄せには、送料負担が伴うものですが、豊田市中央図書館の間では現在のところ、双方の努力により、送料無料でILL業務を行っております。ちなみに、当館から豊田市中央図書館へは看護学図書・医学図書の貸借を行いました。

豊田市中央図書館を直接利用できる方は、貸出期間、貸出冊数ともに直接利用が有利ですが、そうでない方は是非、このサービスをご利用ください。

豊田市中央図書館　http://www.library.toyota.aichi.jp

研究の窓、研究室紹介

母性看護学　教授　森田せつ子

日本赤十字豊田看護大学に赴任し、ちょうど1年経過しました。

本大学との関わりは、非常勤講師として、中村キャンパスにあった短大専攻科よりさかのぼることができます。

私の専門領域は母性看護学および助産学です。その対象および内容は、女性の生涯における健康支援と妊娠・出産・産褥期、育児期にある女性および家族を対象として、親への移行が円滑にできるよう支援することであります。

臨床の原体験は助産師からの出発であり、感動的な生命誕

生場面に多く立ち会うことができました。また保健師として、愛知県保健所の経験もあります。

前任校は名古屋大学医学部保健学科看護学専攻です。そこでの学部、博士課程前期課程・後期課程の新設という仕事に携わり、看護教育が養成所から短期大学そして大学化という新たな動きのなかに自分の身をおくことができ、看護教育制度の大きな変化を自分自身の眼をとおして感じることができたことは貴重な経験となっています。

研究は、現在、やや一休み中ですが、科学研究補助金基盤研究テーマである『出産後の夫婦の親としての自立への介入』と大学院教育のなかで「ジェンダーの保健学」という科目を担当していたこともあり、『男女共生という視点における出産準備教育』という二つの課題について継続をするつもりでおります。学生さんとの研究は、前任校における卒業研究を通して、母性に関する研究を一緒に取り組んできました。今、卒業研究として、4年生6名を担当していますが、物事を探求していく喜びを知っていただければと思っております。

母性看護学領域は、准教授稲垣恵美先生、助手の山本さつき先生、大谷春菜先生との4名で構成されています(写真)。また、この4月より母性相談室を開設し、皆さんの生理に関する相談をしています。一人で悩まないで気軽においでください。

母性看護学領域では女性看護学、周産期看護学の発展をテーマに学生と共に学びを深めていきたいと思っております。

Information

平成19年度公開講座のお知らせ

講 座 名	日時・場所	内　　容	人　数
生活に、 笑いとユーモアを	平成19年10月27日（土） 9：30～11：30 本学内	健康と笑いユーモアの関係について講話をします。その後、笑いユーモアを具体的に生活に取り入れる練習をします。	40名程度
老人の心の病気 （老人性うつ病、認知症）	平成19年11月24日（土） 9：30～11：30 本学大講義室	老人性うつ病、認知症の症状と予防、治療について（かんたんなテストもいたします。）	150名程度

オープンキャンパス報告

本学平成19年度オープンキャンパスについて、第1回（7月21日）、第2回（8月25日）両日とも土曜日に開催されました。あわせて約500名の学生と保護者が参加され、好評のうちに終了しました。

編集後記

「いとすぎの丘」vol.6を1ヶ月遅れで発刊することができました。今までは4月1日付、9月1日付で発刊してまいりましたが、今後は半年ごとの発刊とさせていただきます。

また、ご連絡が遅くなりましたが、前号vol.5より縦書きから横書きに変更しています。「いとすぎの丘」は学内報であり、本学学生及び教職員の活動をお知らせしています。同時に、今後入学希望される高校生ならびに家族の皆様にも本学の活動やその意図を知っていただきたく、見やすい読みやすい紙面づくりをめざしてまいります。

今後もよりよい内容とすべく、皆様からの忌憚のないご意見をいただきたいと思います。

また、本号作成にご協力いただいた皆様に心からお礼申しあげます。

平成20年（2008年）度　入学試験日程等

試験の種別	募集人員	試験日
一般入試	55名	平成20年 （2008年） 2月2日（土）
高等学校長推薦入試	30名	平成19年 （2007年） 11月17日（土）
日本赤十字社中部各県 支部長推薦入試	30名	
社会人特別選抜入試	5名	

入学試験にかかる詳細については、本学企画課（0565－36－5228）までお問い合わせください。

いとすぎの丘 Vol.6

発行日／2007年10月1日
編集・発行／日本赤十字豊田看護大学
広報・公開講座委員会、企画課

〒471-8565　豊田市白山町七曲12-33
TEL 0565-36-5228　FAX 0565-37-8558
E-Mail　info@rctoyota.ac.jp
H P　http://www.rctoyota.ac.jp